



TITLE:

貨幣の本質について - 中山教授に
答ふ -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 貨幣の本質について - 中山教授に答ふ -. 經濟論叢 1938,
46(4): 529-542

ISSUE DATE:

1938-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131086>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第四號 第四十六卷

昭和十三年四月一日發行

論叢

ソロキンの文化的變動形式論

貨幣の本質とその價值

貨幣の本質について

共同體思想の國民的性格

時論

稅制整理と増稅

研究

職分と職業

貿易理論の前提

ダンピングの理論

近世絞油業の發達

說苑

明治初期の國內市場

産業構造の研究と政策

附錄

雜報：外國雜誌論題

(禁轉載)

文學博士 米田庄太郎

商學士 中山伊知郎

文學博士 高田保馬

經濟學博士 石川興二

經濟學博士 汐見三郎

經濟學士 澤崎堅造

經濟學士 松井清

經濟學士 岡倉伯士

經濟學士 住谷勇二

經濟學士 堀江保藏

經濟學士 田杉競

貨幣の本質について

——中山教授に答ふ——

高田保馬

中山伊知郎教授は經濟論叢第四十五卷四號所載の拙稿「貨幣本質に關する若干の問題」に於ける私見に答へて前掲の論文を寄せられた。其詳密なる教示に對して深謝する次第である。本號載するところの教授の所論はなほ前半に止まれども、後半は寧ろ岡橋保教授の批評に對する答辯と見るべきものであり、私見に對する批評は大抵前半に盡されてゐると思ふ。それゆゑに、教授の批評に續いて、それに對する私の立場からの答へを述べることにしたい。昨年末の日本經濟學會に出席し得ざりし遺憾の幾分かは、これによつて償はるゝことになるであらう。

一

念のために私の立場を明にする。

- (一) 一般均衡の成立は必ずしも一般的價值尺度を必要とせず、それはたゞ、間接交換を前提とするだけである。

- (二) 一般均衡の成立が一般的價值尺度を必要とするにしても、それから一般的交換手段の必然性は導き出されない。

私は貨幣を一般的交換手段であると見る。ところが、上に述べたる二の理由によつて、貨幣は一般均衡の成立

と必然的に結びつくものとは見がたい。此意味に於て貨幣は必然の所産に非ずして便宜の所産である。

勿論此表現は若干の説明を必要とする。貨幣が歴史の必然によつて存立することはいふまでもない。此意味に於ては、貨幣を成立せしむる便宜そのものが必然的なものである。けれども、貨幣の理論的考察に於て、貨幣は交換の間から必然に成立せるものであるといふときは、「交換の合理的に行はるゝために即ち極大満足が交換によつて實現せらるゝが爲には必要缺くべからざるものであるが故に、存立するに至れるものである」といふことが意味せられてゐる。此見解を肯定するときには、貨幣は交換にとつて必然であるといひ、さうでないときには、貨幣が交換にとつて必然ならずといふ。茲に必然といひ便宜といふのは、皆かゝる意味に於てするのである。

中山教授の論點は上に述べたる二點に關する。教授の論證の基礎的部分は、價值尺度（以下必ずしも一般的といふ形容詞を繰返さない）が一般均衡に缺くべからざることを明にすることである。それから交換手段と價值尺度との結合は前提とせらるゝものであると説くことによつて、交換手段の一般均衡にとつて必然的な所以を主張せられる。かくて、私の前に掲げたる二の命題はともに否定せらるゝものとなし、貨幣の必然性はそれによつて論證し得らるゝものとせられてゐる。此二段の論據の何れが成立せざるにしても、教授の貨幣必然論は成立し得ぬはずである。

二

まづ中山教授の第一の論點について考へる。教授の此點に關する主張は次の引用の中に明である。

『けれども結局に於て一般的な交換の限界が確定せられるためには(傍點—高田。以下同じ)交換當事者に共通なる尺度を用ひることが必要とされる。これ所謂計算單位としての貨幣であつて現實の貨幣はかゝる計算單位を以て表現せられた交換を完了せしめるためのもの、すなはち交換手段に外ならない。』¹⁾

『私が交換手段の意味をかやうに規定したのは上述によつても既に明白なやうに、何よりも貨幣の必然性をば經濟の基本過程そのものから導き出さうとしたからであつた。即ち先づ第一に經濟の循環が無数の交換から成立してゐる限り、これらの各の交換の一般的限界を考へるためには同じく一般的な計算貨幣が必要であるといふこと、第二に現實の貨幣は右の計算貨幣を實現するといふ意味に於て經濟の循環と不可分であるといふこと、この二つが主張の要點である。貨幣存在の論理的必然性を經濟の基本過程そのものから導き出すことが貨幣現象の理解を深める上に於て如何に重要であるかは今敢て述べる必要はないであらう。』²⁾

『私はワルラスの通貨に於けるこの特徴を指示するために特に計算貨幣といふ名稱を用ひた。かゝる意味の貨幣はかくて、そもそも交換を一般に可能ならしめるもの、その意味に於て交換經濟社會の存立と同時に存立するものとしての重要をもつものである。要するに貨幣を以て一般に間接交換の手段と見ても、之を一般均衡の成立に結びつけて考へる場合に於てはこの交換の手段は必ず一般的な計算貨幣乃至は一般的價值尺度たる資格をまたねばならぬ。何故なれば、それなしには一般均衡の成立のために必要な裁定の限界は考へ得ないからである。』³⁾

『しかしその重要さは正に之によりて裁定作用の限界を確定せしむる點にあるのであつて、この意味に於てワルラスの通貨たる機能を果たすところの貨幣は決して單なる交換手段ではあり得ない。』⁴⁾

教授によれば、ワラスのいはゆる通眞即ち一般的價值尺度が(A)交換を一般に可能ならしめるもの(引用e)であり、少くも(B)一般的な交換の限界が確定せらるゝために必要であり(引用a)、(C)各の交換の一般的限界を考へるために、又は確認せしむるために必要なものである(引用り及びg f)。このうち(A)に於ける「交換を一般に可能ならしめるもの」といふ表現の誇張であることについては教授にも異見のないことであると思ふ。(B)に於ける「一般的な交換の限界が確定せらるゝために必要である」といふ表現は異なる解釋を許す文句であるが、結局は(1)

1) 2) 中山教授貨幣の本質とその價值 本號 13, 14頁。
3) 4) 前掲 21頁。

と同一の内容を意味するであらう。(C)によると、一般的價值尺度の作用あつてはじめて一般均衡の成立のために必要な裁定の限界が考へられる、又は確認せしめられる。こゝに停まりて私は、私見の内容に立ちかへらう。

私は第一の論點をば、價值尺度の作用をまつてはじめて一般均衡が確立せらるゝや如何といふ點にあるとなした。教授は此論點そのものを精確に理解し且つ之を繰返して述べられながら、一たび其意見を積極的に支持する場合には、論點が裁定限界の認識にありとせられる。けれども、まづ裁定の限界の認識が何故に一般均衡の成立のために必要であらうか。『何故なれば一般均衡の成立のために裁定作用が限界に達したか否かを判斷するためには何等かの意味に於て間接交換をも含めたる交換の全體を總觀せしむるに足る一般的基準がなければならぬ』からである。⁵⁾果して教授の考へらるゝが如く、一般均衡の成立は裁定の限界の確認——然り、交換の全體を總觀せしむるに足る一般的基準によるところの——を必然のものとするであらうか。裁定の限界そのものが一般均衡であると思ふ。さうすると、裁定の限界の認識が一般均衡の成立に必要なことといふことは、一般均衡の認識が一般均衡に必要なことといふことになる。けれども、一體一般均衡に於て「全體の總觀」従つて裁定限界の認識をなし得る主體はないはずである。たゞ各の主體が其授受しようとする財に關する限り、もはや有利の交換の餘地のないことを認めてゐるだけである。各自が自己の利益を求むる餘地ありや否やを認める、それだけを一般均衡は必要とする。従つて教授のいはるゝやうに、「一般均衡の成立のために裁定作用が限界に達したか否かを判斷」する必要はない。ことにかゝる判斷を必要とするならば、何人が判斷の主體であるべきか、交換者中の一人であるか、半數であるか、又すべてであらうか。又多數の人々が「全體の總觀」をなし得るとも考へられないではなから

うか。

中山教授はレオン・ワラスに於ける一般均衡の方程式を引用して、價值尺度が一般均衡の成立に必要な所以を論證しようとしてゐられる。ところで、此論證を重要なものとして取扱ひたいと思ふが、それは事實に於て、一般均衡が成立してゐる場合に於ける各經濟數量間の關係の記述である。求められてゐるものは、一般均衡の成立に必要な條件そのものである。ところが、かかる條件の中に、認識そのものは何等とり入れられてゐない。各主體が全體の均衡の成立に關する認識の有無に拘はらずに均衡が成立することを、方程式組織は物語る。

三

そこで、其論證自體に考察の方向をむけよう。中山教授の議論の中から、限界の認識又は確認といふ、少くも私から見ると不必要の要素をとり去つて考へよう。而して問題を、一般的價值尺度なくして一般均衡の成立は不可能なるかといふことに見直して行かう。

此點に關する中山教授の論證は、栗村助教授のそれと同じく、レオン・ワラスの次の如き主張に立脚する。『故にもし、裁定の起らざらむことを欲し、市場に於ける二つ宛の商品の均衡が一般的たらむことを欲せば、任意の二つ宛の商品の價格は、任意の第三の商品を以て表はせる夫れ大れの價格の比に等しい、といふ條件を入れて來なければならぬ。換言すれば、次の方程式を立てることが出來なければならぬ。』

$$\begin{aligned} P_{a,b} &= \frac{1}{P_{b,a}}, & P_{c,b} &= \frac{P_{c,a}}{P_{b,a}}, & P_{a,b} &= \frac{P_{a,c}}{P_{b,c}}, \dots\dots\dots \\ P_{a,c} &= \frac{1}{P_{c,a}}, & P_{b,c} &= \frac{P_{b,a}}{P_{c,a}}, & P_{a,c} &= \frac{P_{a,b}}{P_{c,b}}, \dots\dots\dots \end{aligned}$$

貨幣の本質について

$$p_{ad} = \frac{1}{p_{da}}, \quad p_{da} = \frac{p_{da}}{p_{da}}, \quad p_{ed} = \frac{p_{ea}}{p_{da}}, \dots$$

かくの如くにして合計 $(m-1)$ 個の一般均衡の方程式がある。それには互に逆なる価格の方程式 $p_{da}^{(m-1)}$ が含蓄的に含まれてゐる。ところで、かく總ての価格を表はす所の商品は numéraire である。⁶⁾』

ワラスの説明は正確である。けれども、中山教授がこの引用から引き出されたる結論乃至主張はワラスの意見と同一ではない、否それよりも遙に多くのことを含んでゐる。ワラスは教授の所謂通貨、事實は一般的價值尺度なくして一般均衡なしとは主張してゐない。たゞ一般的に商品の價格がそれによつて表はさるゝものがあるときにこれを通貨といふといつてゐるだけのことである。更に溯つて其文句を解してみよう。市場に於ける二つ宛の商品の均衡が一般的ならむことを欲せば、任意の二つ宛の商品の價格は、任意の第三の商品を以て表はせる夫れ夫れの價格の比に等しい、といふ條件に於ける第三のものは、任意の二つ宛の商品の何れに於ても共通のものたることを必ずしも要しないであらう。此意味に於て、前述の方程式組織は此場合の一般均衡を記述する一のものではあり得ても、唯一のものではないはずである。例へば前述の諸方程式の中から $p_{da} = \frac{p_{da}}{p_{da}}$ をとる。その代りに $p_{da} = \frac{p_{da}}{p_{da}}$ を置きかへよう。此後の方程式は他の諸方程式から直に前の方程式に變化せしめ得る。此意味に於て、前の方程式が他のすべての諸方程式からは獨立なる一の方程式であるならば、後の方程式も亦さうである。であるから、前のものを省いて、後のものを入れても、方程式組織に於ける未知數と方程式の數との關係の上には何等の變化が生ずることはない。要するに一般均衡狀態が成立する場合に充されねばならぬ條件即ち成立に必要な條件が方程式によつて示さるゝはずであるが、その一々の條件は必ずしも唯一の表現のみをもつもの

6) Léon Walras, Élément, p. 119, 邦譯 p. 147, 中山教授前掲19頁。

ではない、他の仕方を以て表現せられうる、かゝる場合には前の方程式の代りに後の方程式を置くことは、當然なしうべきことである。そこで今の場合、ワラスのあげたる諸方程式中、任意のもの、任意の數を他の形に書きかふことが出来る。其際に於て、所謂任意の第三の商品といふものは通貨といふが如き、すべての一對の商品を通して共通のものではなく、a bの關係に於てはcであり、b cの關係に於てはdであり得るわけである。此意味に於て前述の方程式組織は一般均衡の條件を示す唯一の表現ではなく、それは二つ宛の商品の價格が偶々通貨といふ共通の第三商品を以て表はされたる價格の比に等しとして示されてゐるところの表現であるにすぎぬ。

それ故に、前述の方程式組織から、一般均衡の成立のためには *numeraire* が必要とせらるゝといふ議論を導き出すことは出来ぬはずであるし、それはワラスの主張せざりしことを主張する立場であるといふ外はない。此意味に於て、一般均衡の成立のためには一般的價值尺度又は通貨の作用が必要であるといふ主張は成りたちがたいと考へざるを得ぬ。

【論證】

$$P_{ca} = \frac{P_{cb}}{P_{ba}} \quad \text{然るに} \quad P_{cb} = \frac{P_{ca}}{P_{ba}}, \quad P_{ab} = \frac{P_{ba}}{P_{ba}}$$

$$\text{故に} \quad P_{ca} = \frac{P_{cb}}{P_{ba}} = \frac{P_{ba}}{P_{ba}} \cdot \frac{P_{ca}}{P_{ba}} \quad \text{即ち} \quad P_{ca} = \frac{P_{ca}}{P_{ba}}$$

取代へたる方程式は取代へられたる方程式と同一の條件を示すものである。

序にいふ。numeraire が手塚壽郎教授によつても通貨と譯せられてゐるが、通貨は普通流通貨幣の略語であり、currency の譯語として用ひられてゐる。具體的には政府發行の貨幣と銀行券との中、流通界にあるものを含め進みては預金通貨をも含ま

しめる。此意味に於てそれはむしろ *numéraire* にあたる。⁷⁾ *numéraire* の譯語としては價值尺度がむしろ當るのではなからうか。少くも何等の説明なくして通貨の語をこれにあてゐることは、誤解を招くではないかと思ふ。通貨の語を貨幣と對立せしめるならば栗村助教授の如く價值尺度を示すに貨幣の語を以てし、交換手段を示すに通貨の語を以てするのが妥當であらう。

四

假に、一般的價值尺度が一般均衡の成立のために缺くべからざるものであるとしても、それから直に、「一般的交換手段がそれに必要である、換言すれば、交換手段が一般均衡にとつて必然的のものである」といふことは主張し得られない。私のかつての表現を以ていへば、二の間隙に對する架橋の問題がのこる。中山教授の表現に従へば、計算貨幣は交換手段に於て實現せらるゝことを要する。この點に關する私見を略述しよう。

以上の前提を許しても、即ち價值尺度が一般均衡の成立の爲に必要であることを許しても、なほ交換手段の必然性はそれから導き出されぬ。それが導き出さるゝが爲には理論的に、たゞ二の道しか残されてゐない。(1)交換手段の必然性(一般均衡の成立のためにその缺くべからざる所以)を獨立に論證するか、(2)價值尺度と交換手段の不可離的に結合してゐることを前提とするか、即ちこれである。ところで、第一の試みは今まで何人によつても企てられてゐない、それほど此方針は支持しがたいものである。此意味に於て、中山教授も私も共に此方向を進まうとはしてゐないから、之を問題の外に置く。

そこで第二の道について考へねばならぬ。しかし、價值尺度と交換手段との結合が不可離であるといふことは、今日何人によつても論證せられてゐないと思ふ。寧ろ此二の機能の分離といふことが一般的に認められてゐる事實である。

價值尺度は抽象的のものであり、觀念的のものである。交換手段は具體的のもの實在的のものである。二者が同一物の兩面であるといふやうに、不可離に結びついてゐないことはいふまでもない。二者の結合はたゞ次の如きものである外はない。價值尺度（又は尺度としての價值）例へば圓の幾つか（一單位又はその分數又は倍數）が交換手段即ち貨幣によつて支持せられてゐる、又は實現せられてゐる。けれども、此の如く支持せられてゐるといふ關係は、價值尺度と交換手段としての貨幣の間に存するのみならず、その他すべての財との間にも存する。たと商品にあつては一財の一定單位に實現せられ、又は支持せられてゐる交換價值の大きさが一定してゐないのに對し、貨幣の場合には一定してゐるといふ差があるやうであるが、貨幣の場合とても、支持せられてゐる價值の變動する可能性はある。種々なる貨幣種類間の打歩の場合の如きはさうである。此意味に於て、價值尺度が一般均衡の成立に必然的のものであるにしても、それから、交換手段が同様に必然的なものとはいはれ得ぬ。何となれば、二者の結合は一方が他方の所謂實現であること、即ち一方が他方を支持するといふことであるが、これだけの關係ならば、價值尺度も特定の商品の間にも存する。従つて同一の論據から、甲又は乙の商品の作用が一般均衡の成立の爲に常に必要であるといはなければならぬことになる。進みて、此點に關する中山教授の意見に従つてみよう。

『吾々の定義に於ては始めから交換手段としての貨幣なるものに注意が集中せられ、この貨幣なるもの、經濟內的必然性を理解する徑路として貨幣の計算單位乃至は價值尺度機能が問題とせられてゐる。』『私見に於ては交換の手段たる貨幣は單なる交換の手段たることによつて經濟に必然的な存在をなすものではなくそれが計算貨幣を

實現する限りに於てさうであるとするのに對し、博士に於てはこの貨幣の內的必然性が一般的價值尺度の機能を前提とすることなく單に間接交換の必然性を以て充分に論證せられるのである。このことはまづ第一には全面的なる裁定さへあれば一般的均衡は成立するといふ博士の主張に現はれるところ⁸⁾である。これについてまづ附隨的なる部分に答へよう。私は一般均衡が價值尺度を必要とせず、全面的裁定によつて可能であると説く場合に、貨幣從つて交換手段の經濟內的必然を主張する意志をもつてはゐない。飽まで貨幣をかゝる必然の範圍の外に置かうと考へてゐる。此點、前に述べたところから明白である。

中山教授によれば、交換手段は單なる交換手段として經濟內的に必然であるのではなく、計算貨幣を實現する限りに於てさうである。さうすると、計算貨幣が經濟內的に必然であるが、之を實現する限りに於て、從つて勿論、之を實現するが故に、交換手段が必然であるといふことゝなる。

ところで此「實現する」といふ重要な表現について、教授は一たびも説明乃至規定を與へられてゐない。けれども學問上の常識を以てする限り、交換手段が尺度たる價值單位を支持すること、即ち交換手段が何圓のもの、又は單位圓のものであることを意味するであらう。けれども、さうである限り前述の如く、交換價值は他の商品と何等の異なる資格をもつものでなく、從つて其經濟內的必然を認めねばならぬといふ理由はないものと思はれる。

中山教授によれば『貨幣の本質は交換の手段である。⁹⁾』けれども進みて次の如くに説かれる。『唯問題は交換手段といふものゝ意味を規定して、之を計算貨幣を實現するものとした點にある。換言すれば交換手段一般は未だ貨

8) 前掲論文15頁。

9) 同12頁

幣の本質をなすものではなく、計算單位を實現するものとしての交換手段のみが貨幣の本質をなすといふのが要點である。『教授によれば單なる交換手段は貨幣ではない、計算單位を實現するものゝみが貨幣である。ところが此交換手段が一般的交換手段をさすことは、教授の所論の全體から見て明なるところであるが、此實現の意味を如何やうにとるにせよ、計算貨幣の實現であることは、一般的交換手段の本質に屬するもの、いはゞその必然に屬することであると思ふ。計算單位の實現でない一般交換手段がないとすれば、交換手段が計算貨幣を實現する限りに於て貨幣であるといふのは、書籍は、それに文字が印刷せられてゐる限り、書籍である、といふが如く無用の蛇足でないかと思はれる。

五

次に轉じて若干の積極的主張を試みよう。私見によれば、一般均衡の成立は間接交換を缺き得ない。間接交換による裁定が全面的に行はるゝところに、一般均衡が成立する。其間から便宜の所産として一般的交換手段が成立する。一般的交換手段の一定單位が價值尺度となる。このことは、他のものが同時に價值尺度として作用することを妨げるものではない。戦後通貨膨脹の獨逸に於て、馬克紙幣の流通するとき、馬克が價值尺度であることはいふまでもないが、同時に弗が價值尺度であつた。

便宜の所産といふことについて、次の如くに附け加へよう。間接交換が行はるゝに當り、交換手段として數多の財が役に立つ。しかし、役に立つ程度に於てそれぞれ差異がある。即ち容易に相手から價格として受容せらるゝ程度に差異がある。此差異によつて、それらの間に優勝劣敗が行はれる。而して優勝したるものが一般的交段

手段となる。一般受容性に於て相若しくものが相ならびて残存するならば、經濟外的條件から何等かの差異が認められざる限り、共に貨幣として流通するであらう。而して此種の事態は貨幣發達の初期に於ては十分に認められたところである。今A財あり、それが社會に於てm人から直接に需要せらるゝとする。A財を交換手段として一應手に入れて置けば、その受容せらるゝ可能はmだけあるわけである。m人のだれからも受容せらるゝから。さうするとm人中の各自はまた、自らが之を交換手段として使ふ爲ばかりでなく、第三者をして之をかゝる目的に使はせようとして受取る。m人中の各主體はm人のだれにも之をかゝる目的に使はせうる。それゆゑに、かゝる目的の爲に使はせうる可能はm人の各主體にあつてmだけ、従つて、m人全部を通ずると m^2 となる。従つて此二段の過程を通じて考へると、受容性の程度はこれだけの範圍を考察にとり入るゝ限り $3m^2$ であり、概括的にみて人數mの自乗である。従つてB財を直接に需要するものがnであれば、他の條件を全く相等しと見る限り、受容性は n^2 である。それゆゑに、財の種類による受容性の開きは相當に大なるものとなり、其間の優劣淘汰は明白に行はれざるを得ぬと思ふ。而して受容性の程度を決するものは、此の如く單なる經濟的因子のみならず政府の態度、民習等もあることと思はれる。

かくて一般交換手段が成立し價值尺度がそれから派生せられて來ると、價值尺度は交換手段そのものをなくしてすまず傾向をもつものではないか。こゝに價值尺度と交換手段との間の所謂架橋の問題がある。「裁定の起ることを妨げようとするならば」價值尺度が作用しなければならぬ。勿論此妨げる目的が十分達成せらるゝのには他の條件をも必要とするが、とにかく、價值尺度の作用は裁定を省かうとする。従つて交換手段を省かうとする

等である。價值尺度が直に自己を現實の交換手段として實現するとは許しがたい。私はこれだけを、ワラスを典據として立論せらるゝ教授の論法に従へば主張しうるはずと思つてゐる。

私の立論は、(1)價值尺度の內的必然を認めぬこと、(2)價值尺度が必然であるとしてもそれから交換手段が必然でないことを主張するにある。前の點については既に述べ盡した。後の點に關する中山教授の主張は、「價值尺度と交換手段とは本來結びつけるものであるから、其間に架橋を必要とせぬ、いはゞ計算貨幣から交換手段にうつつて行くことを論證する必要がない」といふことに存する。

『吾々の場合に於ては計算貨幣と交換手段とは相並行するものでもなければ又相對立するものでもない。それ故に一方から他方への架橋といふことは博士のいはれるが如き意味に於ては問題とならないものである。』¹⁰⁾

『しかし乍ら私はかゝる解釋がワラスの解釋として先づ成立しないものと考へる。その理由は前節で述べたやうにワラスに於ては通貨と貨幣との理論的關係を考へやうと云ふ要求が始めから存在しないのである。直截に云へばワラスの貨幣論に於て論明すべきものとして目に映つたものは何よりも先づ現實の交換手段であり、而もそれ自ら通貨を實現するところの交換手段であつた。』¹¹⁾

『かくて吾々はワラスに於ける貨幣の問題が通貨から貨幣へといふ説明の順序にも拘はらず、本來現實の交換手段としての貨幣から出發するものと見ることによりてむしろ一元的に解釋し得るものと考へる。私が貨幣の本質を以て計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段であると云ふのもワラスに對する右の解釋に根據を置くものである。』¹²⁾

要するに、現實の貨幣にあつては、二の機能が本來結合してゐるといふのが教授の立場である。けれども、理論の立場は現實の結合、然り歴史的の結合を問題とすべきではないと思ふ。現實の上に、歴史の上に、然り偶然が支配する歴史の上に、二者がいかに結合してあらうとも此結合の必然であるか否かを明にするのが理論の仕事

10) 前掲論文13頁。
11) ” 28頁。
12) ” 29頁。

である、現實にあるものゝ間の必然的聯絡を究明せず、與へられたるものを與へられたるものとして受取るならば、これは理論そのものゝ廢業を意味する。況や二者の結合は現實に於ても教授の要求せらるゝが如きものと思はれぬ。價值尺度は一般的交換手段から離れることが少くない。カッセルの引用してゐる平均的な大さと質とのある魚、又は平均的な牡牛といふものは、現實の交換手段としては存在してゐなかつた。¹³⁾戦後の獨逸に於て弗が價值尺度であつたときにも、弗貨幣は流通しなかつた。二者の結合はこれを如何に狭く解しようとする現實に於てすら與へられてゐない。

而して二の理論的な關係は明白である。ワラスの一般均衡の方程式組織を見る、價值尺度はあれども、交換手段はない、いはゞ抽象せられてゐる。このこと自體が二者の結合の理論的に必然ならざることを示してゐる。貨幣即ち交換手段はあくまで便宜の產物である。栗村助教授は價值尺度のみを所謂經濟內的に必然なりと論ぜられた。中山教授は進みて『交換と同時に成立するもの或はその意味に於て交換をそもそも可能ならしむるものである』とせられる。私の栗村助教授に對する抗議は價值尺度が經濟內的に必然ならずといふことにある。中山教授に對してはこの外になほ一の抗議を申出でうと思ふ。價值尺度と交換手段との結合とは必然ならず、といふこと、これである。ワラスの交換手段の導入に關する中山教授の解釋についても異論をもつが、事枝葉に互るから論及をさける。

『貨幣の理論』の執筆以後、貨幣の必然性の問題は私の最も關心をもつものの一であつた。此點について教授の指示によつて啓發せられたところ少からず。たゞ多年熟慮の末到達したる結論が教授の見解と餘りにも異なることは、たゞ共に所信に忠ならむとする限り、仕方のないことである。

(一九三八、三月)

13) Cassel, Theoretische Sozialökonomie, S. 338.